

# 「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』報告

楠 田 剛 士

本特集は一〇一九年七月二八日に開催された第五九回原爆文学研究会で行つた「原爆文学」再読7——青来有一『爆心』の報告内容を記録するものである。

長崎在住の青来有一は、最初の単行本『聖水』（文藝春秋、二〇〇一・二）から近作「フェイクコメディ」（『すばる』二〇一八・九）まで、長崎原爆の記憶を小説に描き続けてきた作家である。今日の原爆文学を考える上で重要な作家の一人だが、十分に読まれ論じられているとは言い難い。青来の小説の問題と可能性を議論したいと考え、再読では『爆心』（文藝春秋、二〇〇六・一）を取り上げることにした。当日はまず楠田剛士が『爆心』の受容史を整理した。次に畠中佳恵氏が『爆心』で繰り返し描かれる表象について青来の他作品と関連させながら考察した。そして四條知恵氏が「虫」に注目した報告を行つた。個別の報告はそれぞれご覧いただきたい。ここでは発題後に行われた全体討論の内容をお伝えする。

まず青来と遠藤周作との関連について質問があつた。神の不在話題提供があつた。記事では、素朴な物語を書くことに限界を感じ

が問われ続けて虚のように埋まらないことや、信仰を持たない者としての虫についての報告があつたが、例えは『沈黙』を書いた遠藤周作のように既存のキリスト教を批判しようとする視線があるのかどうか。これに対して畠中氏は、青来作品では隠れキリストの信仰が一番の問題になつておらず、『爆心』では既存の神とタンの信仰が一番の問題になつておらず、問題としても浮かび上がつてこないと答えた。また『爆心』後の展開として「人間のしわざ」（『すばる』二〇二二・一）、「神のみわざ」（『すばる』二〇一三・一）などを発表しているが、そこで作者は虚の問題に対し信仰の問題として答えを投入していく作業に没頭していくように見えると述べた。四條氏は永井隆の燔祭説を引きながら、なぜ浦上に原爆が投下されたのかという問い合わせと同じだが、永井は明快に答えを出す一方、『爆心』ではあえて答えを出さない選択をしているのではないかと述べた。



じたこと、技法を繰り返すことに飽きたこと、新しい小説を探るなかで「釘」が執筆されたこと、二〇〇五年に林京子全集の発刊イベントで林から自由に書いていいと言われたが被爆者の一人称小説は書けなくなつたこと、「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」（文學界）二〇一四・三で被爆者との関わりを描くことで行き詰まりを抜け出せたことなどが述べられていると紹介された。これに對して楠田は、『爆心』の初刊刊行時でも創作背景や新しい原爆文学の模索について語られていると答え（青来有一、聞き手）「本の話」編集部「被爆後六十年の原爆文学」「本の話」二〇〇七・一二）、畠中氏の報告資料に「断片的な私小説的手法の移行が試みられてゐる」とあつたように、近年は遠藤周作、林京子、石原慎太郎との対話を描く作品が特徴的だが、最新作「ノンセクトラジカル」（『三田文学』二〇一九・八）ではまた方法を変えてきているようを感じるとコメントした。

次に動物と虫が話題になつた。3・11以後の小説、たとえば古川日出男や川上弘美などの作品には馬や熊など動物が描かれてゐる。古川は東北と馬の歴史を調査して書いており、人間が馬の気持ちを表現できるかという問題を突き詰めている。しかし『爆心』では虫の視点から書かれているのではなく人間中心の視点から描かれており、人間の生活、感情、考え方を表現するために虫が利用されているように感じるが、これについて何か考えはあるか、という質問があつた。これに対して畠中氏は、3・11後的小説においても動物は利用されているのではないかと述べた。四條氏は、虫自身の被害は空白であり、虫の視点を弁することはできない。『爆心』は人のために書かれた小説であるが、これまでの証言と



司会・報告 楠田 剛士

は違つた語りを提供していると思うと述べた。

フロアー間でも動物について意見が交わされた。3・11後の場合、被災地から出ろと言われて出される人間や、牛飼いとして残る人間もいるが、動物は避難できない存在として可視化され、小説に描かれやすくなつてゐるのではないかという意見が出た。また3・11後、動物たちの未来を考えるきつかけを与える小説が増えた印象があり、一方原爆は死体と虫が結びつくイメージがあるという意見も出た。こうしたやりとりを受けて、四條氏は、虫の被害を描くなら「自然科学」ということになるが、『広島・長崎の原爆災害』を繰つてみると虫と動物の被害は二頁だけで被爆直後は人間も虫も被害もよく分からぬため、自然科学でも人文科学でも虫の被害は空白になつてゐると述べた。

関連して環境文学の視点からのコメントもあつた。今までの「人間中心主義ではなく人間も環境の一つだ」という環境文学の考え方がある。林京子はトリニティに行つたときに大地そのものの死に非常に衝撃を受けたが、全体の死に対するまなざしは青来作品にはないといつてよいか。これに対して畠中氏は、青来にとつては虫の生命力が被爆地の復興をもたらす希望の光景になつたことが非常に重要だつたようで、いろいろなところで語つていてと答えた。楠田は、青来の小説の関心は原爆が人間に何をもたらしたのかにあると答えた。

表現についての質問もいくつか出された。一つは性描写である。



報告 畠中 佳恵

『爆心』のなかで起こる出来事や、歴史的な原爆の語りから離れていくときにキーになるのが欲望である。

欲望の対象や欲望の仕方が、メタファーとして、メトミニーとして原爆に結びついてくことを意識的にやつてゐる作品だと思った。だが男性・

女性の性欲が単調で、ステレオタイプになつてゐるようと思う。原爆の語り方は更新されてゐる気がするものの、かえつて通俗的な性愛や性差を補強している感じがするが、青来作品における性愛についての考えを聞きたいという質問があつた。これに対しても畠中氏は、異性間の性器に焦点を当てるようなものになつてゐるのはその通りだと思うが、表現においては通俗性を求めるながらも典型的なものから離れて、少し刺激を与える形にしようと模索しているのではないか。表現そのものが官能小説と同じかどうかは研究しないとわからないと答えた。

作中で繰り返される「虚」のイメージについて意見があつた。六篇それぞれに「虚」がある構造は分かつたが、「虚」の反響とは何かが気になつた。また六篇の順序の必然性をどのように考えているか。「釘」は土地に縛られ逃れられない話であり、「鳥」は原爆のときに拾われて土地とのつながりの無さに苦悩している話であるように、「虚」に対する向き合い方が否定的なものもあるば、そうでないようなものもある。「虚」をイメージでつないでいくとして、「反響」といつたときに読者のレベルで、登場人物のレベルで何が起つてゐるのかを知りたい。これに対しても畠中



四條 知恵 報告

氏は、「虚」の反響は二つの太鼓の片方を鳴らすともう片方が鳴るというくらいでイメージしている。虚から虚へというのは青来が書いていることであり、作品を超えて読み手の中で隣接させていくのではないかと答えた。

作者についても話題に上った。青

来は本名の中村明俊としては原爆資料館館長としてこの三月まで勤めていた。平和行政の顔として世

界に長崎を発信していく立場にあり、3・11もあった。こうしたことが作家の立場とどのような関係性にあるか、館長を辞めたいまま風は変わらぬのか、自由に書けるのか、という質問があつた。これに対して楠田は、「フェイクコメディ」のよう近年来は原爆

資料館館長でもある作家が語る作品が続いているが、最新作「ノ

ンセクトラジカル」はそうではない。さきほど紹介があつた新聞記事で、書くのに飽きたという作家の発言を取り上げられたが、

小説家としていろいろな方法を試してみたい気持ちがあると思うと答えた。畠中氏は、二〇一九年四月からは長崎大学核兵器廃絶

研究センターの客員教授になつてるので何をもつて「自由」といえるか。資料を追つっていくなかで立場に縛られた不自由さよりも、読者や評者が述べたことをとても気にされる方のように感じる。デビュー作「ジエロ二モの十字架」を私小説に模して書いたことが読者を引っ掛けていると評されたため、その方法はもう使わないという発言や、編集者が受け入れないからという発言もよく出てくるので、基本的に不自由な方だと思うと述べた。四條氏

は、館長を辞める前は作風はどう縛られていたのか、青来の小説をカトリック教会の方はどうとらえたのか気になると述べた。

その他、小説とラジオドラマの違いに関する質問、青来の文学的な素養・背景を知りたいという質問などがあつた。これについて楠田が、ラジオドラマの脚本は青来自身によるもので枠組みは同じであること、映画は青来が認めた改変であること、大江健三郎や宮澤賢治を熱心に読んだと作家が語っていること、石原慎太郎が芥川賞の選考で高く評価し、受賞後に対談していることを説明した。

約五〇分の討議でも議論は尽きなかつた。残された課題も多いが、本再読がきっかけとなり、青来の個々の作品の読み直しや青来文学の研究が発展になることを期待したい。全体討議に参加された皆様にお礼申し上げます。

※特集にあたり科学研究費補助金（若手研究 19K13056）の助成を受けた。